

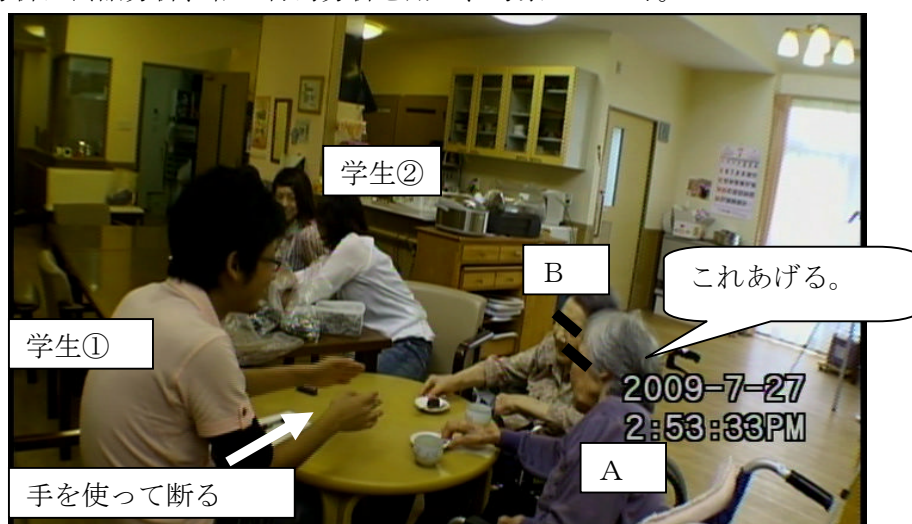
第5章 もてなし規範における入居者／学生（ゲスト／ホスト）の相互行為分析

齊藤雅彦
大上梨奈
尾崎諭

1. 問題関心

本調査では、2009年7月27日、28日にグループホームBにおいて、学生（①、②）と認知症である入居者（A、B）の方との会話を、エスノメソドロジーの立場から会話分析および、相互行為分析を行ったものである。

今回の分析で扱う場面は認知症グループホームにおいてのおやつ時間である。学生が持っていったお菓子が入居者に振る舞われたシーンだ。ここでは、スタッフがお菓子を入居者だけに1つずつ配った¹ことが話題の焦点となる。そのため、14:53:20にBが「みなにあげてくれたらええのに」と発話し、スタッフへの不快感を示す。その後、Aが「これあげる」という発話とともに学生①にお菓子を差し出す。続いて、Bも学生①や学生②にお菓子を差し出すというシーンである（写真1）。つまり、入居者が学生にお菓子を振る舞っている場面だ。そして、最終的には入居者が学生にお菓子を振る舞うことに成功し、学生①、学生②の両者ともお菓子を食べ、入居者の目的は達成される。では、入居者はどのようにして学生にお菓子を食べさせることに成功したのだろうか。この問いに答える為、本分析は会話分析、相互行為分析を用い、考察していく。



▽14:53:33 写真1 学生①にお菓子を差し出すAとB

¹ 最終的には学生にもお菓子は配られたので、入居者分のお菓子の再分配をしていたケースでは、むしろ配布量は均等にはならなかった

2. 予備的考察

2-1. 問題設定—ホスト／ゲストに存在するもてなし規範

では、入居者が学生にお菓子を差し出す行為にはどのような意味を持つのだろうか。入居者は施設にとってのクライアントであり、それ相応のサービスを受けることは至極当然である。実はお菓子は学生が持参したものであるが、そのため、学生にお菓子が配られないことも不思議ではない。ただ、入居者が知らない場合も多分にある。とりわけ、ここで考えられることは、入居者(ホスト)²にとって学生は突然の来訪者であり、お客さま(ゲスト)である。そのため、ここではホストとしての入居者がゲストとしての学生を〈もてなし〉たいと考えるのが自然であり、規範的義務³と言ってもいい。つまり、本分析はホスト／ゲスト間のやり取りにおいて、ホストがゲストにお菓子をどのように食べさせることができたのかを緻密に見ていく。そして、このお菓子を食べさせるという達成が、この場面においてもてなし規範があるということが出来る。つまり、このことは認知症グループホームに住む入居者のコミュニケーション能力を見ていくことにも関連する。

2-2. 規範と行為

ここでは、前節で取り扱った規範と、それに伴う行為についてまとめていきたい。小宮によれば、規範と行為の関係について「規範によって行為を説明するのではなく、私たちが規範をどのように用いて行為をし、また行為を理解しているのかそのやり方自体を研究しよう、というもの」(小宮 2007 : 107) と述べられており、私たちもこの研究法に同調したい。

つまり、今場面ではもてなし規範があるからこそ、入居者や学生が役割に基づいて、行為しているのではなく、どのような行為に基づいて、どのようなもてなし規範が存在するのかを緻密に見ていくことで、もてなし規範における入居者と学生の相互行為を明らかにしていきたい。

² これから入居者のことをホストとする。

³ ホストがゲストにもてなしを考えていると考えられる場面にはもてなし規範があると定義する。

3. 分析①—もてなし規範におけるホストの発話テクニック

ここでは、主に発話に焦点を当てて分析を行なう。いかにホストがお菓子を食べさせようとしているか、それに伴い、いかにゲストが誘いを断っているかについて会話分析をすることで見ていきたい。しかし、今場面では、ゲストのもてなしは失敗に終わる。そのため、ここでは、発話を中心にしたホストの誘いのテクニックを吟味していく。

3-1. 分析視点—もてなすことと遠慮すること

先述したように、この場面ではもてなし規範があるとされるような行為がいくつも見られる。ホストがゲストに対し、もてなしをすることは規範的義務であり、ゲストに無礼があっては、ホストの体面に傷がついてしまう。つまり、もてなすことは好意を示すだけではなく、体面を守ることでもあると考えることができる。また、ここで学生が遠慮することも場面に適切である。理由として、①お菓子は学生が持ってきたものであること、②お菓子は施設に住まう入居者のみに配られたものであることが、まず考えられる。これらは一般的常識から考えられる理由である。では、もてなすという行為そのものについてはどうであろうか。もてなしを受ける側にとって、好意の象徴であるもてなしを承諾することは基本的には優先的に行なわれなければならない。しかし、もてなしをすぐに承諾することには負債感、罪悪感⁴が伴う。つまり、もてなしを受けることは優先であるが、すぐさまもてなしを承諾するのではなく、何らかの断りという緩衝材がはさまれる。つまり、その緩衝材はもらったときの違和を軽減する働きがある。もてなしを承諾しながらも、なるべく負債感が生じない為のテクニックとして遠慮という行為があるのだ。よって、ここで学生が断ることも適切である。つまり、受けとれないことを志向していることが、後で受け取るという行為の適切性を生み出すと考えることができる。

それでは、もてなし規範の中において、ホストにはどのようなもてなしがあり、ゲストにはどのような遠慮があるのだろうか。つまり、ホスト／ゲストの誘い／断りを次節で会話分析をすることで考察していきたい。

4 「遠慮がないと思われる」「礼儀を知らないと思われる」などが相当する。

3-2. 会話分析—誘うことと断ること

〈断片 1〉 1 行目～14 行目

01A 食べときなさいよ

((学生①にお菓子の皿を差し出す))

02① fufu

→03A 若いもんが食べなんだら (*)

((お茶のコップを差し出す))

→04① いえいえ、これたぶん自分がお持ちしたお菓子なんですよ。

((お菓子を指さす))

05A いいや (0.1) [ま：食べない。 (*)

((お菓子の皿を学生①の方へ押す))

06② [あ：：：

((学生①と目を合わせる))

07① いえいえ

→08A (仕事した者が食[ベ

09① [いえいえ、それ、み (0.1) みなさん同じような

((Aさんに手を向ける 手で丸を描く))

お仕事された ha んで (0.2) ぜんぜん

((両手をお皿に添える))

→10A わたしやせなんだけん (*)

((皿に手を添えたまま))

→11① いえいえ、も：ぜんぜんぜんぜん

((両手をお皿に添える))

やってることは同じなんで he (0.1) どうぞどうぞほんとお気遣いなく

((両手をお皿に添える Aさんに両手で))

12A はよお食べ (0.2) 若いもんが食べたって

((体勢が後ろへ))

13A

((コップを学生①のほうへ押し出す))

→14A はよ食べなはれた。 (*) これ (スプーンで・すくって) 食べな。

((フォークを持つ 学生①を見る))

*食べなんだら…食べないと

*食べない…食べなさい

*せなんだけん…しなかったから

*はよ食べなはれた…早く食べたらどうですか

まず、注目するのは3行目のAの発話「若いもんが食べなんだら」である。若いもんは学生①を意味する。ここでは、2重の意味が考えられる。年寄りではなく、若い人が食べるべきという志向と、若いから年寄りに気を遣いなさいという志向である。つまり、年寄り：若者カテゴリー対と、先駆者：若輩者という二重のカテゴリー対が見てとれる。しかし、4行目で学生①は「いえいえ、これたぶん自分がお持ちしたお菓子なんですよ。」とあなたに勧められているお菓子は私が持ってきたものだという強い切り替えしがなされる。つまり、もてなしをするホスト／もてなしを受けるゲストというカテゴリー対から、お菓子を持ってきた学生／お菓子を頂いたゲストというカテゴリー対に転換されたのである。さらには、8行目A「(仕事したものが食べ)」や10行目A「わたしゃせなんだけん」と発言する。ここでいう仕事とは、お菓子が配られる前に4人で作業した煮干の頭取り(写真2)である。Aは痛みの為、利き手である右手をあまり使いこなすことができず、作業に積極的に参加していたとはいえない。だからこそ、Aの主張である「わたしは仕事をしていない」はこの場面において適切であるし、Aより作業をした学生①にかかる言葉としても適切である。しかし、9行目の学生①の「いえいえ、それ、みなさん同じようなお仕事された ha んで(0.1) ぜんぜん」や11行目「いえいえ、も：ぜんぜんぜんぜんやってることは同じなんで he どうぞどうぞほんとにお気遣いなく」のように学生①は作業量には差があったかもしれないが、やっている仕事は同じであるとAを気遣いながらも、誘いを断る。

この場面では、入居者は学生をもてなすことを失敗してしまったが、Aのもてなしは終わらない。どのようなもてなしが続くかを以下で考察していく。



▽14 : 27 : 25

写真2 煮干の頭取り

3-3. 動作と発話—お菓子を薦めることと自分を卑下すること

ここではホストの行為と発話 14 行目に着目する。ホストはお菓子を学生に薦めるときに何かしらの発話と何かしらの動作を伴う行為をすることが多い。とくに、発話のみでお菓子を薦めるという行為は今ケースにおいてはほとんど見ることはできなかった。では、その発話と動作が同時に行為として行なわれることはどのような意味があるのだろうか。まず、動作を見ていくと、学生にお皿、コップを近づけるなど、お菓子を学生に薦める行為そのものである。しかし、発話は A の 1 行目の「食べときないよ。」や 5 行目の「いいや (0.1) ま：食べない。」のようにお菓子を直接進める発話だけではない。A の 3 行目の「若いもんが食べなんだら」や、10 行目の「わたしゃ（仕事を）せなんだけん」のように食べてもらいたい意図とは反した一動作とは間逆の一行為を伴う場合が多い（写真 3）。つまり、動作はもてなし規範に忠実に基づいた好意を示しているが、発話はゲストがいかにか学生にお菓子を食べさせるかという志向に基づいていると考えることができる。しかし、14 行目で A は「これ（（スプーンで・すくって））食べな。」と、ともに同じベクトルに志向した動作と行為が初めて為される（写真 4）。（スプーンを持ちながらスプーンに志向した発話をする）よって、これ以降は、動作に重きを置いた分析をしていく。



▽ 14 : 54 : 46

写真 3 お菓子を薦める動作と自らを卑下する A



▽14 : 58 : 00

写真4 スプーンをもつA

3-4. 考察一段階を踏まえた誘い

3節ではもてなし規範をうまく利用するAの誘いのテクニックと学生①の断りのテクニックを見てきた。特に、Aの誘いからはさまざまなトピック転換をするというテクニックが見られた。

まず、Aは3行目において、自らの老いと相手の若さに着目して誘いをした。次に、8行目ではほんの前にした仕事に言及してみせた。そして、最終的には、14行目でスプーンに言及した。これらの誘いの流れは自然でありながら、どこか段階を踏まえていると見ることもできる。詳しく言うと、まずは、普遍的であり、誰にでも理解可能な知識を利用し(3行目)、次には、この場面に参与している者しか理解することが出来ない事象を利用し(8行目)、そして、発話では無理と悟ったAは発話ではなく動作と道具を用いて、誘いをしている。つまり、Aは誘いを受け入れさせやすくするために、誘いの流れをある程度コントロールしていたと考えられる。このことは負債感から逃れるために、学生が誘いを受け入れやすくする段階を踏まえた誘いであるとも考えることができる。

4. 分析②—使いこなす資源／使いこなされる資源

本節では、前節でお菓子をあげることが出来なかった A と B の発話と動作に着目して分析していく。

4-1. 分析視点—2つにわけるということ

ここでは、14行目から着目していく。Aの発話14行目「((スプーンで・すくって)) 食べな。⁵」から、Bがお菓子を2つに割ると学生2人にわけることができるという考えを思いつき、Bはお菓子を半分に割り、生徒をもてなすことに成功した。このBのお菓子を2つに割り、2人の学生に渡そうとしている行為は、Bの思いやりや配慮の表れであり、もてなし規範を用いて、その場その場にある偶然の産物を用いている何よりの証拠であるといえる。そして、それを見ていたAも、Bと同様に2つに切ろうとするが、Aは身体の不自由さからお菓子を2つに割ることが不可能であった。しかし、最終的にAは学生①にお菓子をもてなすという行為を成功させた。ここでは、Bの成功後、Aがどのようにもてなしを成功させたのかを分析していく。

4-2. 使いこなす資源

まず、1行目「食べときないよ」・3行目「若いもんが食べなんだら」・5行目「いいや まあ食べない」のようにAはお菓子を食べるように誘う発話と同時に、お皿やコップを学生①のほうへ近づける、フォークを持つといったような動作が伴っている。Aは先述したように、右利きであるが右手に痛みがあるため自在に操ることに困難が伴う。また姿勢も常に右に傾いている。このAの身体的能力から考えると、学生①にお菓子を差し出すという行為は、遠くにいる学生②に差し出すよりも、Aにとって距離的に容易なことである。つまり、右しか使うことができないAにとって学生をもてなす方法は、“学生①の方へ差し出す”しか選択肢がないといえる。しかし、Aはいつも身体が右に傾いていて、右手を使うことも容易ではない。それにもかかわらず、わざわざ身体を起こして、お皿を学生①の方へ近づけるという行為は、Aの学生をもてなしたいという気持ちの現われを強く志向している。この場面において、AはAの身体という自らの資源を使いこなすという、ホストとゲストの身体配置を理解した上での相互行為をしているのだ。

⁵ ここでの発話を上手く聞き取ることは出来なかったが、なんらかの器具、道具に志向した発話であることは間違いない。そのため、後の考察についても不備はない。

4 - 3. 会話分析—使いこなされる資源

〈断片 1 部分〉 17 行目～76 行目

- 17B [2つに割ったらええんで (*) (1.0) な
((フォークを持ち、お菓子を切る))
- 18B (14 秒) かたいな
((お菓子を切っている))
- 19A ()
- 20② どうぞ食べてくださいね。
((手を B さんのお菓子の方へ差し出す))
(4.0)
- 21A
((フォークを持とうとするがパッと離す))
- 22A これ食べないよ。若いもんが。
((フォークを持つ))
- 23B
((切った片方を学生①に差し出す))
- 24① fu っじゃ：じゃ：一口いただきますね。
((差し出されたお菓子をもろう))
はい (0.2) ありがとうございます。ありがとうございます。
- 25A
((フォークを持つ。B さんを見る))
- 26B
((学生②を見る。もう一切れを学生②に差し出す。))
- 27② どう (0.1) どうぞ食べて (1.0) [いや h
((手を B さんに差し出す))
- 28B [これ持ちんさい (*)
((学生②の手にお菓子をのせる))
- 29② ほんとに
- 30B はよあがって (*)
((お茶を飲む))
- 31② どうしましょ：
((学生①を見る))
- 32① いただきます fu
((お菓子を口元に持っていく))
- 33A
((フォークでお菓子をつつく))

- 34② いいんですかね
- 35① うん
- 36B はよ食べなさい。(2.0) (どうする) ことないで
((湯飲みを学生②に向けて出し、机に置く。学生②に手で催促))
- 37② (1.0) いただきます。
((大きくうなずく。口にお菓子を入れる))
- 38② [すみません、ありがとうございます。せっかくのおやつを。
((フォークを B さんのお皿に置く))
- 39A [(お菓子を切ろうとする))
- 40① ((A さんを手伝う))
- 41② ありがとうございます。
- 42B お茶あげなんだな。(*)
- 43② んん!
((B さんのほうに手を差し出す。))
- 44② どうぞ、大丈夫です。
- 45① (4.0) ん fufufu
- 46A ()。私には (ついて) こん。
((フォークでお菓子を切っている))
- 47① そうですね。ちょっと。
- 48A 食べて。
- 49① さっきいただいたんですよ。[でも
((B さんに向かって手を向ける))
- 50A [もういらん。
((フォークを離し、B さんを見る))
- 51① お茶は? いらないですか。
((お茶をさす))
- 52A お茶もいらん。
- 53A (8.0) これはいる。
((フォークを持つ。お菓子を口に運ぶ))
- 54① はい。食べれるかな。一口でいったら、大丈夫かな。
- 55① ha
((A さんの口元に手を持って受け皿のようにする))
- 56① 大丈夫。あっ落ちた落ちた落ちた。
((落ちたお菓子を拾う))

- 57A [fufufu
 →58① [大丈夫?じゃ:これ半分に切ろうか。
 ((お菓子をお皿に置く))
 →59A 半分にしたらええな。
 ((フォークでお菓子をつつく))
 60① うん。半分に、ここ [で
 ((A さんを手伝う))
 61B [食べない。
 62① これでどうですか
 63A よ:食べて
 ((お菓子を口に運ぶ))
 64① よく嚙んでくださいね。
 →65A
 ((フォークを B さんの方へ持っていく))
 66B 置いといて。
 ((A さんの手を押す))
 67① fufufu
 68B (まだ食べよんのに、おまはん。こっちに持って来よったって。)
 ((A さんをさす。自分のお皿を A さんから遠ざける))
 ((B さんと学生②が微笑み合う))
 69A
 ((お菓子をつつき、学生①を見る))
 70① fufufu
 →71A
 ((フォークを B さんの方へ持っていく))
 72B ()。食べないかんで (てで)
 ((A さんの手を押す))
 →73A (3. 0) これ食べて。
 ((フォークを置く。学生①を見る))
 74① いや、も:いらないんですか?
 ((お菓子を指す))
 →75A いらん。
 →76① じゃ:いただきますしょうか。[悪いんでね。

*2 つに割ったらええんで…2 つに割ったら良い
 *これ持ちんさい…これ持ちなさい

*はよあがって…早く食べてしまって

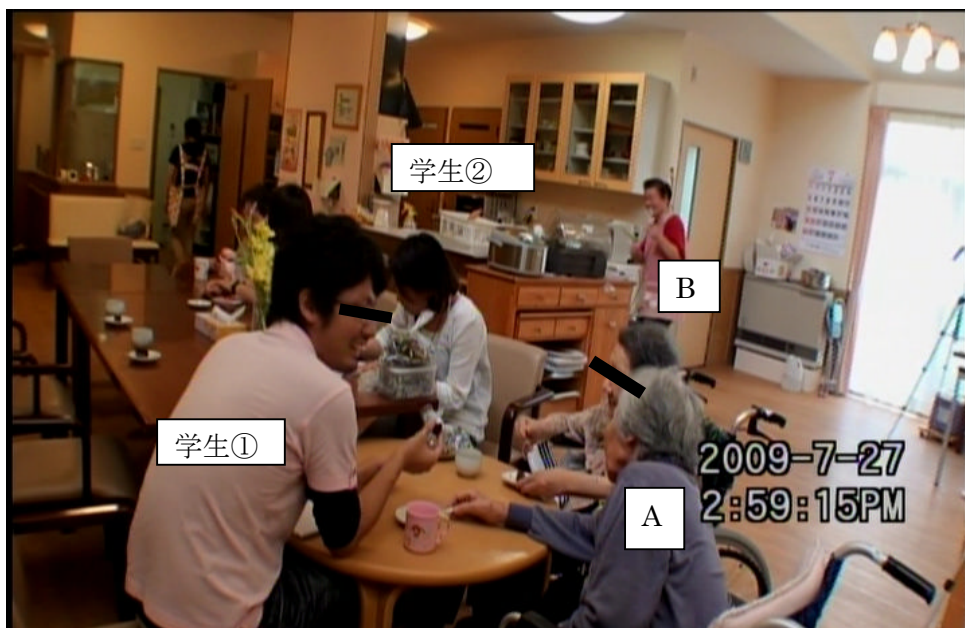
*お茶あげなんだな…お茶をあげなかったね

14行目のA「これ（（スプーンで・すくって））食べな。」という発話よりBは17行目の「2つに割ったらええんで（1.0）な」という発話で見られるようにお菓子を2つに割るといふ考えを思いつく。そしてBがお菓子をあげることに成功した後のAの動きを見ていく。25行目でフォークを持ち、Bを見たAに見られるように（写真5）、AはBの動きを見て、フォークを持ち、お菓子を切った行為をし始める。33行目のAではお菓子をフォークでつつくだけであった（写真6）が、39行目のAではお菓子を切ろうとしている（写真7）。しかし、Aは右手を使うことができるが、非常に力が弱く、一人でお菓子を切ることができなかった。すると、48行目のA「食べて。」という発話から見られるように、Aは再び学生①に食べるよう発話で誘う。これは2つに切ることでもてなそうとしたが、Aの身体的能力では切ることができず、それでも「もてなす」という規範を成功させるために、“自分では切ることができない”という理由をつけ、直接的に食べることをすすめた発話である。しかし、学生①はBからお菓子をもっていた為断る。Aは再びもてなすことに失敗してしまう。

Aは53行目で「これはいる。」⁶とフォークを持ってお菓子を食べようと口に運ぶが、Aの能力ではフォークを上手く使うことができず、お菓子は落ちてしまった。そこで、58行目で学生①は「じゃあこれ半分に切ろうか」と提案した。Aも59行目で「半分にしたらええな。」と同意している。そしてAは半分食べた後、65行目や71行目のように持っていたフォークをBの皿のほうへ持っていきこうとする（写真8）。これは、Aのお皿にはもうフォークを戻すことはできない、もう自分はいらぬという意思表示になっていると予想できる。しかし、このAの行動はBに拒否されてしまう。そして、Bに拒否されたので、学生①をもてなすには口で直接言うしかなく、Aは73行目で「これ食べて。」、75行目で「いらん。」と発言した。48行目でもAは「食べて。」と学生①に言うが、その時点では学生①はもうお菓子をBから半分もっていたことや、入居者が食べるべきものであるという考えがあったため、Aのお菓子を食べることは不適切であった。しかし、73行目で「食べて。」ということは、Aが半分食べていることから、ここで残り半分のお菓子は学生①が食べるべきものになるということが理解可能となった。また、74行目で学生①が「いや、もういらぬんですか？」と最終確認して、75行目でAは「いらん。」と答えている点から、学生①がお菓子をもろうことの適切性が増す。そして、76行目の学生①の「じゃ：いただきましょか。悪いんでね。」の発話にある、“じゃ：”で学生①が食べることを正当化し、“悪いんでね”で食べることへの意味づけをしているのである。

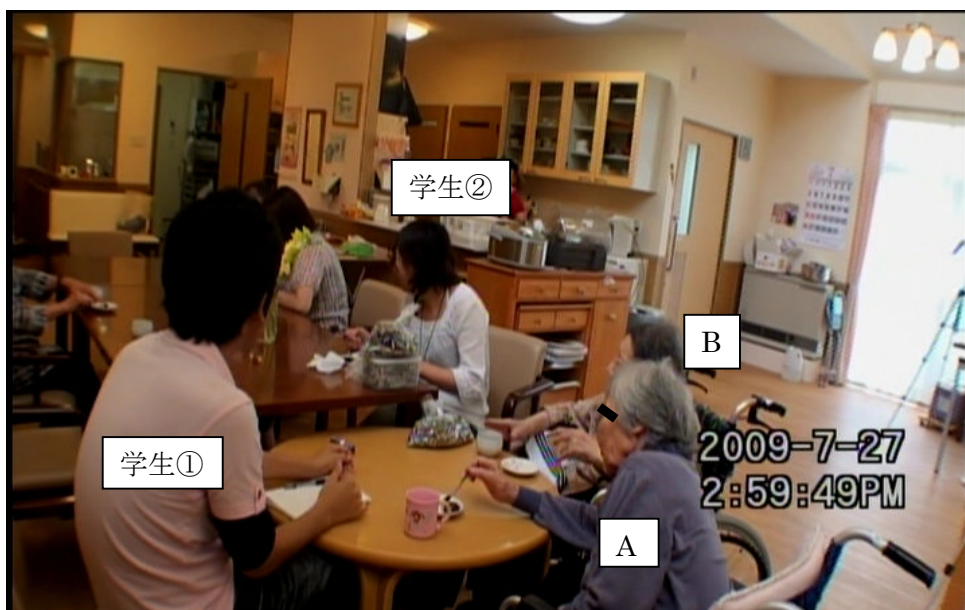
⁶ Aの53行目の「これはいる。」の発話はずじつめの合わない発話である。これは認知症的なものなのか、もてなす為の戦略なのかは会話分析では理解することができない。しかし、この発話を理解しなくても、後の分析は可能であるし、私たちの主張は変わらない。

確かに A はお菓子をあげるというもてなし行為を何度も失敗していた。しかし、最終的にもてなしの行為を成功に導いたのである。その過程は偶然であるかもしれない。ただ、もてなし規範のもと、偶然に起こっている資源（例：お菓子が落ちて、半分に切ることの提案）を扱い、もてなしを成功させたといえる。言い換えると、様々な相互行為において、偶然にも表出された資源は人々によって使いこなされているのである。



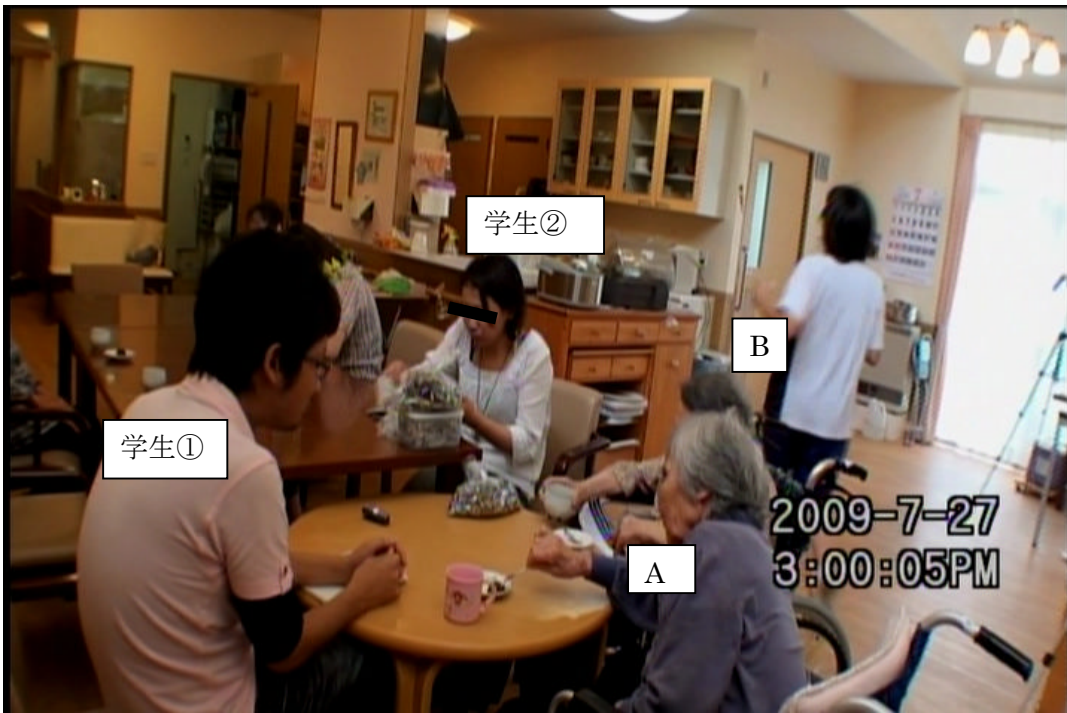
▽14 : 59 : 15

写真 5 B を見る A



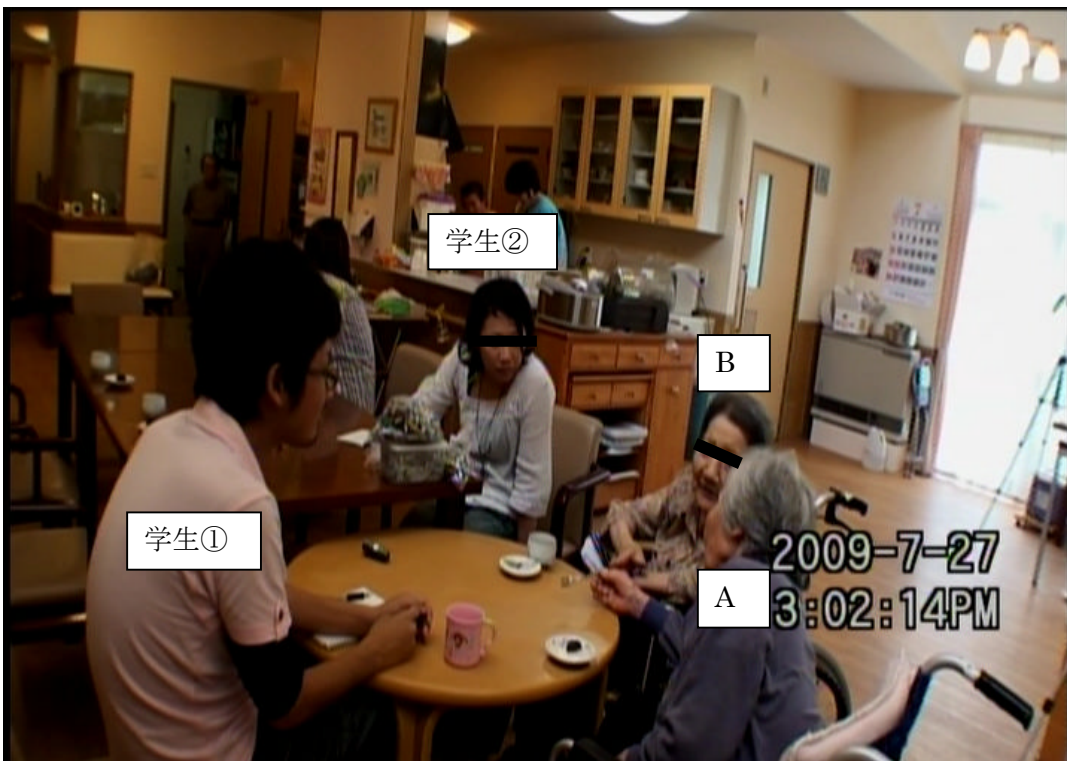
▽14 : 59 : 49

写真 6 お菓子をフォークでつつく A



▽15:00:05

写真7 お菓子を切ろうとしているA



▽15:02:14

写真8 持っていたフォークをBのお皿の方へ持っていくA

5. まとめ

今回の分析ではもてなし規範を用いた行為について分析してきた。そこには、発話により見られるもてなし行為（3節）から、動作により見られるもてなし行為（4節）への変化を見ることが出来た。

3節では、さまざまなカテゴリーを使い、さらには段階的な話題転換をするというテクニックを用い、誘いを展開したが、ホストの試みは失敗に終わった。

そして、スプーンという道具を用いるという発話から、次の場面に進行し、動作を用いることへとつながった。

4節では、自らの身体という資源や偶然に起こっている周りの資源を用い、誘いを駆使するホストのテクニックが見られた。

つまり、もてなし規範を用い、さまざまなテクニックを駆使することで、お菓子を食べさせるという目的を達成した。

言い換えると、Aにはその状況に応じ環境に適応する相互行為能力があると言える。

最後に、今回の報告書執筆にあたり、貴重なお時間を割いて私どもの調査事例の検証に参加しご協力をくださった、信州大学医学部井口高志氏と京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻木下衆氏、また調査協力の依頼に応じてくださったグループホームBの関係者の方々、入居者の方々には深く御礼申し上げたい。

付録

〈断片〉 おやつの時間

日時：7月27日14:57～

場面の参加者：入居者A、入居者B、学生①、学生②、スタッフ

▽ 14:57:08

01A 食べときないよ

((学生①にお菓子の皿を差し出す))

02① fufu

03A 若いもんが食べなんだから

((お茶のコップを差し出す))

04① いえいえ、これたぶん自分がお持ちしたお菓子なんですよ。

((お菓子を指さす))

05A いいや (0.1) [ま：食べない。

((お菓子の皿を学生①の方へ押す))

06②

[あ：：：

((学生①と目を合わせる))

07① いえいえ

08A (仕事した者が食[べ

09① [いえいえ、それ、み (0.1) みなさん同じような
((Aさんに手を向ける 手で丸を描く))
お仕事された ha んで (0.2) ぜんぜん
((両手をお皿に添える))

10A わたしやせなんだけん
((皿に手を添えたまま))

11① いえいえ、も：ぜんぜんぜんぜん
((両手をお皿に添える))

やってることは同じなんで he (0.1) どうぞどうぞほんとお気遣いなく
((両手をお皿に添える Aさんに両手で))

12A はよお食べ (0.2) 若いもんが食べたって
((体勢が後ろへ))

13A
((コップを学生①のほうへ押し出す))

14A はよ食べなはれだ。これ (スプーンで・すくって) 食べな。
((フォークを持つ 学生①を見る))

15A 若いもんが [食べな。年寄りは

16① [fufu ちよつと

17B [2つに割ったらええんで (1.0) な
((フォークを持ち、お菓子を切る))

18B (14.0) かたいな
((お菓子を切っている))

19A (())

20② どうぞ食べてくださいね。
((手を Bさんのお菓子の方へ差し出す))

(4.0)

21A
((フォークを持とうとするがパッと離す))

22A これ食べないよ。若いもんが。
((フォークを持つ))

23B
((切った片方を学生①に差し出す))

24① fu っじゃ：じゃ：一口いただきますね。

((差し出されたお菓子をもらう))

はい (0.2) ありがとうございます。ありがとうございます。

25A

((フォークを持つ。B さんを見る))

26B

((学生②を見る。もう一切れを学生②に差し出す。))

27② どう (0.1) どうぞ食べて (1.0) [いやh

((手を B さんに差し出す))

28B

[これ持ちんさい

((学生②の手にお菓子をのせる))

29② ほんとに

30B はよあがって

((お茶を飲む))

31② どうしましょ :

((学生①を見る))

32① いただきます fu

((お菓子を口元に持っていく))

33A

((フォークでお菓子をつつく))

34② いいんですかね

35① うん

36B はよ食べなさい。(2.0) (どうする) ことないで

((湯飲みを学生②に向けて出し、机に置く。 学生②に手で催促))

37② (1.0) いただきます。

((大きくうなずく。口にお菓子を入れる))

38② [すみません、ありがとうございます。せっかくのおやつを。

((フォークを B さんのお皿に置く))

39A [

((お菓子を切ろうとする))

40①

((A さんを手伝う))

41② ありがとうございます。

42B お茶あげなんだな。

43② んん!

((B さんのほうに手を差し出す。))

44② どうぞ、大丈夫です。

- 45① (4.0) ん fufufu
- 46A ()。私には (ついて) こん。
((フォークでお菓子を切っている))
- 47① そうですね。ちょっと。
- 48A 食べて。
- 49① さっきいただいたんですよ。でも
((Bさんに向かって手を向ける))
- 50A もういらん。
((フォークを離し、Bさんを見る))
- 51① お茶は？ いらぬですか。
((お茶をさす))
- 52A お茶もいらん。
- 53A (8.0) これはいる。
((フォークを持つ お菓子を口に運ぶ))
- 54① はい。食べれるかな。一口でいったら、大丈夫かな。
- 55① ha
((Aさんの口元に手を持って受け皿のようにする))
- 56① 大丈夫。あつ落ちた落ちた落ちた。
((落ちたお菓子を拾う))
- 57A [fufufu
- 58① [大丈夫？ じゃ：これ半分に切ろうか。
((お菓子をお皿に置く))
- 59A 半分にしたらええな。
((フォークでお菓子をつつく))
- 60① うん。半分に、ここ [で
((Aさんを手伝う))
- 61B [食べない。
- 62① これでどうですか
- 63A よ：食べて
((お菓子を口に運ぶ))
- 64① よく嚙んでくださいね。
- 65A
((フォークをBさんの方へ持っていく))
- 66B 置いといて。
((Aさんの手を押す))
- 67① fufufu

- 68B (まだ食べよんのに、おまはん。こっちに持って来よったって。
(Aさんをさす。自分のお皿をAさんから遠ざける))
(Bさんと学生②が微笑み合う))
- 69A
(お菓子をつつき、学生①を見る))
- 70① fufufu
(10.0)
- 71A
(フォークをBさんの方へ持っていく))
- 72B ()。食べないかんで(てで)
(Aさんの手を押す))
- 73A (3.0) これ食べて。
(フォークを置く。学生①を見る))
- 74① いや、も：いらないんですか？
(お菓子を指す))
- 75A いらん。
- 76① じゃ：いただきますしょうか。[悪いんでね。
77A [え：
78① じゃいただきますね。じゃお茶飲んでください。お茶。これ甘いんで。
(お皿に手を添える。 お茶のコップをAさんの方へ持っていく))
- 79A 甘いな。
- 80① ね：。お茶どうぞどうぞ。
(お茶をAさんの方へ持っていく))
- 81① のど渇い [た
82A [お茶飲む
(手をコップへ伸ばす))
- 83① うん。() じゃ：いただきますね
(お菓子を持つ))
- 84A (はい、どうぞ)
(お茶を飲む))
- 85① ありがとうございます。(0.5) さっきからもらってばかり。
(お菓子を口に運ぶ))
- 86①
(お菓子を食べる))
- 87 ス (3.0) ごめんな。おそなって
(生徒のおやつを持ってくる))

88 ス

((学生①のおやつを持ってくる))

89① ありがとうございます。

90 ス (3.0) ()

((Aさんの肩をたたき耳元に話しかける))

91A [fufufu

92 ス [fufufu

参考文献・引用

小宮友根 (2007) 「第 5 章 規範があるとは、どのようなことか」、前田泰樹・水川善文・岡田光弘編『エスノメソドロジー—人びとの実践から学ぶ』新曜社、107